

第四章 東京植民地



東京植民地の青年会の皆さん 最前列左より2番目坂本一徳 3番目馬場直の両氏

コーヒー耕地の周囲に展開する広野、自然林、特にその自然林と広野の間に流れる河川の沿岸の沼湿地帯、そこは農地と云われるにはほど遠く、ましてはコーヒー耕主達からも伯人農家からも見向きもされない利益なき地域であったのだが、水田を営む日本移民にとっては故郷の米作歴史の血が騒ぐ唾涎の土地であった。「あの低湿地を開拓し米作するものなら、故郷の水田を忍ばせる黄金色の稲穂が実る」、思い焦し希望に燃えた。日本移民は耕地の畑で黙々とコーヒー摘む間も「ブラジル人は何故最良の米作適地に稲を植えないのか？」と云い合っていた。

そんな低湿地を開拓して稲を植えて、主食である米を収穫することで食糧を確保することが日本移民の抱負で、そしてその低湿地を借地し耕した。こうして生活材料を生産することから、日本移民の間らしい最初の歩みが始まった。

初は蒔かれ見事に稲は実った。だが収穫する秋に日本移民はマラリア菌に冒された。同胞の埋葬に墓地まで出かけ帰り着く頃、次の犠牲者が続出した。疲れ切った心身に鞭打ち、近道となる鉄道線路沿を言葉なく同志の遺体を担う開拓者達、悪寒と高熱に悪戦苦闘、それほど最悪の初年度であった。付近の伯人社会から嘲笑されたが、遂に日本農民はマラリアの瘴烟する地帯を米作豊穰地帯へと耕していった。（「移民40年史」）

平野と同窓で、後輩の東京外語出身の福川薩然、富岡漸（すすむ）も同グアタパラ耕地に来ており、平野の下に邦人コロノの監督を勤めた。滝沢仁三郎や馬場直等もそこに集まったが、滝沢や馬場は平野に重用されずにトレイロ（乾燥場）のカマラーダ（日雇い労働者）として働いた。

1年が過ぎた。新移民が着いたので、畑中、福川、富岡等は同耕地を去って、又新移民を率い通訳となって、モジアナ線の他の耕地へ転耕した。平野から不平組と見られた滝沢はグアタパラ耕地を出され、モジアナ線のカニンデ駅付近コンキスタ奥ラゼアード耕地の低地（現在のイガラパーバ市南部地区）へと移転。

もう1人の不平組の馬場はコロノ契約中より、耕地に近い事から大沼を隔てたパウリスタ線モツーカ駅付近（グアタパラ耕地とは目と鼻の先）の低湿地を、同士と開墾米作の熱情を燃やし借地を始める。長崎県人の馬場直、熊本移民の前橋宗一、三次一平、志水新蔵、古庄日吉、坂本一徳、小畑末次、村上定八等の家族であった。それは1915年10月であった（ブラジル年鑑後編59ページ）。（馬場謙介氏の調べた記録では1915年3月とある。この時期に関しては平野運平が開拓した平野植民地がブラジル初の日系植民地か、あるいは馬場直の開拓した東京植民地が最初かと、大変大きな話題になったとか。今回に置いてはその記録通りに両方記載する。）注：平野植民地では1915年8月3日を開拓記念日としている。

モツーカ植民地と呼ばれるが、後年東京植民地と名を改め、70家族421名約7百アルケーレスの植民地になった。米作ばかりの単作ではなくコーヒー、綿花、果樹園もやり、養蚕もやった。この借地農に倣って、この界限には借地農の綿作り、米作集団が続出する。（1933年頃であった）。

当時籾1俵（60キロ入）値は7ミル・レーイス（4円20銭）で売れた。その生産費は1俵1ミル500～2ミル位。

1915年リンコン駅付近のグランデ河畔の湿地に稲作を邦人農家15家族で行い、初年度蒔き付け面積は12HAで400俵、収穫期に家族人員大半がマラリアに罹患した為収穫減。当時籾1俵9ミル・レーイスで売れた。生産費3ミル・レーイスと史実に残っている。（「移民40年史」）



大きな木の切り株前の馬場氏



果物畑にて

開拓初年度に、先陣 15 家族の内稼働員の 8 名がマラリアに葬られ、18 キロ離れたリンコン墓地へ背負って埋葬して、戻れば又犠牲者が出るものだった。開拓 25 周年までに 84 名の犠牲者を出す全員マラリアであったわけではなく一部がマラリアで他の病気もあった。

1925 年には初値最高 1 俵 80 ミル 1 家族 200 俵収穫農家もあり、この頃東京植民地と改め、34 ～ 5 家族の集団地であった。

それから 10 年この地帯にはモンテ・アグレ植民地 17 家族 94 名コリギーニョ植民地 20 家族 120 名、ダス・アルマス植民地、バナナル耕地（1 植民地、1 耕地を含めてリンコン駅周辺で 20 家族 125 名）、チンピラ駅にサンタ・マリア耕地 5 家族 31 名、東京植民地 39 家族 235 名、ベンチビ耕地 6 家族 40 名、カボ・ダース・カッサ耕地 6 家族、モツーカ駅周辺で 93 家族 531 名等々の植民地と借地農があった。（「在伯日本移植民 25 周年記念鑑」）

九州の特に熊本県人の入植者が、8 割以上も占めた植民地の代表格の馬場氏は長崎県人。その植民地名が東京とは、……。このもっともらしいお洒落な名称の由来に興味をだき、馬場謙介氏の奥さん實子さんに私（林）伺うがわからず、「消えた移住地を求めて」小笠原公衛著）によると馬場氏達が植民地登記の際、ガイゼル髭をたくわえたリンコン（僻地の意味）市登記所の所長で通称“キンカスさん”本名ジョアキン・ヴィエイラ・モウラ氏が名付け親を引き受け、日本の首都に因んで東京と名付をした。この人は地域の顔役であり、これを縁に東京植民地の方々を夫婦で庇護、婚姻、出生、死亡等の諸々手続、且つズサンで複雑な地権、農地侵害に助言、調査など手助け、東京植民地で営農に携わった 1 千 5 百家族の方々に力を貸してくれた。

東京植民地その名称の由来

*馬場 直の経歴（抄） 馬場謙介筆

本籍地 長崎県南高来郡南串山村 2739 - 2

生年月日 明治 20 年（1887 年）6 月 10 日生

渡伯年月日 大正 3 年（1914 年）4 月 26 日



馬場 直（すなお）

ブラジルにおける馬場直の経歴

大正3年2月10日若狭丸で1676名からなるブラジル移民の1人として神戸を出港。同4月26日サントス港着。サン・パウロ州モジアナ線グアタパラ耕地に契約移民として配耕された。当時直27歳妻コハル24歳（故人）、家族構成員として渡辺喜代三（当時13歳）の3名からなる家族であった。

翌1915年、同耕地で約1ヶ年の契約農年を果たしたが、離耕組の中で平野（運平）派と馬場（直）派が分かれ、馬場は15家族を連れてパウリスタ線モツーカ駅管内モンテ・アグレレ川両岸にまたがる原始林に東京植民地開拓の1歩を印した。

此処に時を同じくして発足した平野、東京両植民地がブラジル移民史に於ける2大マラリアの植民地として、血と汗と涙による壮絶な開拓史が刻まれていった。

やがて、馬場を頼りに、年を追って入植者が増加していったが、先陣15戸の内、家長以下稼動員8名が既に初年度にマラリアで葬られた記録が物語るように、犠牲者はあとを断たなかった。

1 移住者保健に献身

馬場家（士族）は代々医業に携っていた。父は明治の初期、西洋医学（蘭学）の研究者として、日本でも最古の1人であった。又弟正喜（故人）も東京帝国大学出身の医者であった。こうした家柄で育った馬場はブラジル移住に備えて、医学の知識を習得して来たといわれるが、それが当地、植民開拓に不可避であった風土病対策に適切な役割を果たすことになったのである。

やがて、東京植民地を中心に傘下八ヶ所の日系移住地が出現したが「移民は棄民なり」と云われた当方で、

出先公館や機関は救援の策を施さず、交通の不便、最悪の経済状態にあってこれら移住者の健康に尽した彼の苦労は辛酸を極めたという。

こうした馬場の献身的な奉仕と共に、特筆しなければならないのは、コハル夫人の存在であった。夫人は、長崎県立産婆学校を卒業していた。不便な開拓地における移住者達の出産の問題を考慮した、馬場の周到な深慮をみる。この植民地で出生した子供達は、殆ど夫人の手を経ており、その数は幾百とも云われる。ただ一途に慈愛をもって世に捧げた夫人は稀にみる人格者として尊敬されていた。こうした無医村地帯であれば、当然貧しい伯人達まで馬場夫妻は差別なく奉仕した。

ところが、いつか馬場の行動が、アララクワラ医師会の知るところとなり、無免許医として抗議を受けたが「馬場は、われわれの病気を無料で治療してくれているのだ」と云う強い反論がついに診療を継続せしめた。この話を伝え知った当時有名なラウルーレイテ製薬会社は、移住者のためにと、沢山の医薬品が無料で馬場に届けられるという美談も生まれた。

東京植民地並びに傘下八日系移住地の土地を踏んだ、日系農家は千5百家族と推定される。これら日系人の保健に全力を尽くし、犠牲者を最小限に止めた馬場の拓人的精神は、ブラジル移民史に類例がないといわれる。

戦後、在伯日系功労者叙勲沙汰があった時、自らの叙勲を辞退した開拓の租人。鈴木南樹翁をして「、、、このような人にこそ、日本政府は勲章をおくるべきだ」（日伯毎日新聞 1969年付）と述懐せしめている。



日本語学校前での東京植民地の皆さん

2 教育問題

開拓の年から 1946 年退植するまでの 30 年間、馬場は植民地の日本人会々長を務めた。その間開拓の苦しい中に片時も忘れなかったのは人作り、即ち子弟の教育問題であった。入植と同時に、20 人足らずの学童のために建てられた植民地最初の学校は、丸太にワラぶきという粗末なものだった。だがその翌年には、当時としては立派な木造の校舎が広い運動場と共に建てられた。日語教師を雇い、欠員の時はコハル夫人が代行した。当初の移民は金を儲け、故郷に錦を飾るという一旗組で、頭から伯語教育の必要を認めなかった。そ

うした人々を説得して、伯語教育のため伯人教師を雇い入れ、また青年には日語習得のため夜学を実施した。遠くて通学出来ない児童は自分の家に預かって通学させた。

やがて、馬場が夢みた理想郷としての東京植民地は、ブラジルに於ける三大植民地の一つとして栄え、模範村として注目されるに到り、新任の大使や総領事を始め、有名人の視察の的となっていた。そうした視察者から当植民地の青少年の教養と質実さを賞賛され、他の日系植民地では見られない異色とまで宣伝されていた。

なお馬場は地方にあって、当時サン・パウロ市に設置された教育普及会（外務省補助機関）の外郭的協働の功績が認められ、1939年2月帝国教育会から「在外邦人子弟教育事業に寄与」する者として表彰され、銀杯を贈られたのであるが、ひたすら私を去り、苦勞を忘れて行動した彼の感激は、表彰や銀杯ではなく、けだし植民地の繁栄であり、青少年教育の向上にあったのである。

その功績を評してサン・パウロ新聞（1973.8.11日付）は、馬場の死に際し、「、、、その遺産は、馬場さんの信念とともに、東京植民地出身の3世、4世にまで伝わっている。東京植民地の形は今は既にはないが、無形の東京植民地はコロニアの心の中に、いつまでも生きている。馬場さんはコロニアという大地に爪跡を残してくれた」と報じている。



植民地第1回日本語卒業生 1918年

3 農業

先祖代々医業という家柄に育ちながら、馬場は心から農業を愛した。新天地ブラジルへ移住して来た理由が、そこにあった。斧と鋤の開拓時代に早くも機械農を説き、低湿地の利用、略奪農並びに森林乱伐を戒め、土壌の改良、保全、灌漑施設の必要を提唱した。これらの対策問題は近年とくに叫ばれているのであるが、既に半世紀前に、馬場はこれを実践して示した。その先見は驚愕すべきものであるが、時代はそれを認めず、また経済的に許せなかったことは、故人が終生遺憾としたことである。

後年蔬菜の改良種育成に専念したが、アルファッセ（萵苣＝学名 lactuca satin）の交配固定種育成に成功した。このアルファッセは、BABA として登録されるに至り、10 種に及ぶアルファッセの中で最も優れた品種として一般に普及され賞味されている。



東京植民地全景と綿作地

4 人間としての馬場直

凡そ生涯を通じて偽りのない性格の持主であった。馬場が最も忌避したのは形式であった。日常の挨拶すら不得手な彼の吐く言葉は常に短刀直入であった。一片の冗談を言えず、聞くことすら好まなかった馬場の剛直な性格は一面明朗性を欠き、人との交際の上では、必ずしも好まれるものではなかった。然し彼と接触を重ねる者として必ず襟を正させる半面があった。

馬場は、日本政府より3度にわたって表彰されているが、これを他人に示すことを好まなかった。それはこうした形式嫌いの性格と同じ希望と想念のもとに、植民地の開拓半ばにして犠牲となった先没者に対する悲しみと、支え合って今日まで生き抜いて来た開拓の同志たちが、年とともに消えていく尊い姿に対する敬意であったのである。

馬場のブラジルに於ける60余年の生涯は、奉仕と犠牲の一語に尽きた。そして農業をこよなく愛した彼が、一片の土地すら所有せず、正に無一文で静かに世を去った姿こそ尊いものがあった。

馬場が半世紀前に提唱した低湿地の利用が鐘ガ江農場によって元東京植民地管内に大々的に開発され、また戦後移民によって新生グアタパラ移住地が造られ、そこでも低地の開拓がはじまった。そのニュースを聞いた時「おお、、、、拓人の足跡は消えず」と述懐した馬場の言葉は拓人としてのすべてを物語っているであろう。以上が1974年の馬場謙介筆による。



総領事を迎える馬場氏 右から2番目

(後記)

開拓 25 周年（1933 年）最盛期には総勢 1500 人の開拓者が出入りしていたものが搾取農であったため、地力が衰え 1 人、2 人と別転地へ移転し始め、戦後の 1945 年には、20 家族まで減り、1953 年には 15 家族、其の後植民地にただ 1 家族残って長い事農業に従事していた阿武（あんの）さんも娘の嫁ぎ先のグアタバラ市に移転する。

1946 年には、入植以来 30 年間臥新嘗胆を生地でやってのけた馬場直氏が終戦後勝ち組、負け組における認識派（負け組）であり、終戦直後日本へ留学している謙介氏（息子）からの「日本は敗戦した」という手紙が届いた。それを同植民地からグアタバラ方面まで見せ回す。これが裏目となり退植に追いやられ、殺害の気運になり植民地の一青年がいち早く植民地を離れるよう知らせてくれるが、コハル夫人と子供達はピラシカーバ市内に、すでにピラシカーバ農大を卒業し住居している息子の所へ移転。本人（直）だけ植民地内自宅のハリの上に昇って待ち受ける。最盛期頃には 400 アルケール所有していた農地も入植者に便宜を計り、残り僅かの農地も勝ち組に邪魔されて売ることが出来なかった。その内に中芸弥伊助氏（和歌山県人）が購入してくれ身辺の整理ができ、直氏もピラシカーバ市に身を寄せる。

1946 年～1957 年の十数年間にわたるピラシカーバ市在住中、植民地から訪問された人はわずか 2 人で、その内の 1 人は勝ち組の人達が馬場氏を殺害するので逃れるよう知らせてくれた青年であった。

馬場氏の子息謙介氏は 1941 年日本外務省招聘留学生として訪日、終戦後日伯国交回復後、当時留学生として在日していた 2 世約 50 人を先に帰伯させ、最後の平田ジョン・進（後年連邦下院議員）を送り出したあと、本人は 1953 年に帰伯する。（「蒼氓の 92 年」101 ページ）

1953 年馬場謙介氏の帰伯、帰郷入りの際、日本で伴侶に迎えた實子夫人と一緒に東京植民地に入れず、夫人をアララクワラの知人（祖国日本の敗戦を認識したもう 1 人の元植民者のアドバイスは、敗戦を知らせた手紙の 1 件が有るので取り敢えず 1 人行きを進める）に預け幼友達、隣人などと親交をあたためあい、話ができただけで、實子夫人を連れて故郷入りをする。

これら一連の出来事に謙介氏もいたく傷つく、同氏が生前最後に書き残した書籍“故郷なき郷愁”の題名は消え去った東京植民地を指したものか、あるいは、父馬場直にたいしてなされた残り少ない、植民者による

冷たい仕打ちへの声なき訴えでもあったのか、あるいは、残り少なくなっていた植民者の自分への冷たい態度について父直氏へ声なき訴えであったのか、この書籍中では全然といえるほど自己出生地でもある東京植民地について記載がない。(馬場實子夫人と筆者との対談をもとに書く)



東京植民地の青少年角力、最前列左 3 人目馬場謙介君、最後列左 4 人目坂本広君 (1938.6.15)

(追記)

“日本の敗戦を知らせた手紙、父親の敗戦認識等で植民地との軋轢を心配しながらの帰耕であったが、幼友達の友情は大変厚いものであり、本人が亡くなる日まで続き、過ぎし植民地時代を懐かしく思い出して居りました。また最後に出版しました書籍「故郷なき郷愁」は馬場謙介の自伝ではなく、40年間書き続けた自分の仕事を一つに纏め書籍に残したい夢が実現したものであるため、東京植民地のことは一篇も触れてないものでした。”(これは馬場實子さんの述懐です。)

昔の苦しい時代を助け合い、喜びを分かち合ってきた人々が心から東京植民地を愛し誇りに思っていた、幼いころからの友情は大変尊いものであり、誰も汚すことはできないものです。

(馬場實子さんの感想を含みながら追記するものです)